

## 62. 広島に捧げられた音楽

第二次世界大戦の悲劇として今日語り継がれているのが、ユダヤ人の大量虐殺（ホロコースト）<sup>1</sup>と、広島と長崎に投下された原爆です。戦争を速やかに終息させるために投下したのだという、アメリカの行為を正当化する意見もありますが、新型爆弾の実験をしたいという思惑もあったようです。しかしどのような大義名分があろうと、市街地に原爆を投下して、民間人を含む多くの人を一瞬间にして灰にしてしまう大量破壊兵器の使用については、戦後、多くの議論がなされ、その非人道的な行為は非難されました。広島と長崎に投下されて以降、原爆が使用されていないことから、兵器の恐ろしさが想像できます。

人類がかつて経験したことのない、こうした悲惨な体験は、音楽家たちの心をも揺さぶりました。そして広島や長崎への原爆投下とその悲劇をテーマにした作品が、少なからず生み出されています。中でも有名なのが、ポーランドの作曲家ペンデレツキの●『**広島に捧げる哀歌**』です。これはすでに作曲してあった自作品（1960年作曲）を、「哀歌threnody」として広島市に献呈したものでした。さまざまな音を縦横無尽に重ねる手法によって、犠牲になった人々への哀悼の気持ちを表現しています。

日本ではあまり知られていませんが、20世紀に活躍したフィンランドの作曲家アールトネンの交響曲第2番は『HIROSHIMA』と題されています<sup>2</sup>。この作品は1949年に作曲され、その後、フィンランドで初演されています。アールトネンはヘルシンキ・フィルハーモニーでヴィオラ奏者としても活躍していました。1953年に日本から客演指揮者として朝比奈隆がフィンランドに招かれたおりに、この交響曲の楽譜を渡しました。焦土と化した広島の惨状を憂い、広島の復興を願って作曲したことを伝え、日本での演奏を求めたのです。そして2年後、広島での日本初演が朝比奈の指揮で実現しました。その日は終戦、つまり被爆から10年を経た終戦記念日にあたりました。



1 ユダヤ人の音楽家については、エピソード60、63を参照。

2 アールトネンについて知りたい方は、能登原由美の一連の発表論文を参照することを勧める。今回この項目を執筆する際にも参照し、これまで個人的にも何度か話をうかがう機会があった。